

## 高橋喜平 自然とその人生

絵本作家 澤口 たまみ

高橋喜平氏が九十五歳でこの世を去ったのは、二〇〇六年二月一日、いまから二十年前の冬の終わりである。もうそんなに経ってしまったのかと、にわかには信じがたい。すると高橋喜平（わたしにとっては喜平さんと呼ぶのが当たり前だが、ここでは一般的に作家を呼ぶときのように敬称を略してみよう）は、東日本大震災もコロナウイルスのパンデミックも、年を追うごとに深刻になる地球温暖化も昨秋の驚くべき熊の出没も、いずれも経験していないのだと改めて思う。雪氷学の研究者で、雪氷はもちろんツキノワグマをはじめとする雪国の野生動物やマタギの狩猟文化など、自然と人間の営みについて考察したエッセイを数多く残した高橋喜平が存命なら、この二十年の出来事をどのように記したのだろう。

そもそもわたしが、こうして原稿を書いているのも高橋喜平のおかげである。一九九〇年のエッセイスト・クラブ賞に拙著『虫のつぶやき 聴こえたよ』（白水社）を推薦したのが高橋喜平だった。ありがたくも賞を頂戴したあとは、「僕が第八回であなたが第三十八回だから、三十年後の受賞になる。まるで親子のようだ」と、

と、たいそう喜んでくださった。単に岩手の後輩であるだけでなく、自然を見つめて書いている点を認めてくれたのだと、わたしは密かに自負している。

当時、高橋喜平はテレビ番組への出演も精神的にこなししていた。わたしがインタビュアーとして呼ばれる機会もあり、そんなときは少ばかり身なりを整えて現場に向かった。スプリング・エフェメラルと呼ばれる早春の草花を紹介する番組では、束ね髪に花柄のリボンを結んでいたのだが、高橋喜平はわたしを見るなり鋭く言った。

「あなたは澤口たまみじゃない。彼女はね、もっと田舎臭い人間なの」

あのとき高橋喜平が拒否したのは、わたしの身なりの自然との違和感、花咲く野原で花柄のリボンを結ぶ愚であつたらうか。

自然を見つめて言葉を紡ぐという営みは、こ岩手では宮澤賢治に遡ることができる。彼もまた「水仙月の四日」や「雪渡り」といった作品で雪を描き、「なめとこ山の熊」や「鹿踊りのはじまり」で野生動物と人間との交流を描いている。そして高橋喜平は、かつて女性や恋愛とは無縁とされ、聖人として扱われていた賢治に対し、「彼も普通の男性だった」と、いち早く指摘した人物でもある。わたしの記憶によれば一九八七年の夏、盛岡市内の小さな自然保護団体の主催で開かれた講演会において、賢治に思いを寄せた女性のエピソードを紹介し、

「賢治は彼女に布団を贈った。はじめは賢治のほうも満更ではなかったはずだ」

という意味のことを述べられた。いまでもわたし自身も賢治の恋を確信しているが、当時は「賢治は聖人にあらず」と発言するだけでも

勇気を必要とした。わたしは高橋喜平の「誰も言わないことだからこそ自分が言う」という姿勢に感銘を受けた。それは現在、賢治について語るときわたしの信念ともなっている。

高橋喜平の最後の仕事は、九十歳を過ぎて岩手県北部にある八幡平に通い、高山植物の観察を続けた結果、新種の「ハチマンタイアザミ」を発見したことだ。キク科植物であるアザミの花は、数多くの小花の集まりであり、その小花を束ねている部分を「総苞」と呼ぶが、総苞の粘りが強く、昆虫を捕獲するほどの粘着力を持つアザミが存在することに、高橋喜平は着目したのだった。その研究の一部始終は『高橋喜平九十歳 新種アザミ発見』（岩手日報社）として一冊にまとめられた。わたしも編集に携わったが、本が完成するころには、高橋喜平はすでに入院していた。

おそらくは最後の著作になるであろうと家族が判断され、出版記念パーティーが開催された。高橋喜平は車椅子で来場すると、壇上から挨拶をした。その言葉はごく簡潔だった。

「九十年あまり生きてきて、わたくしがいま思うことは……」会場は静まり返って、次の言葉を待った。わたしもその一人だった。

「人の心の温かさであります」

ああ、と会場からため息が漏れた気がした。あるいは、わたし自身の感嘆が大きすぎて、会場全体から響いたように感じたのか、それは分からない。ただ、自分もまた人生の終わりに人の心の温かさに感謝していたいと、痛切に思っ

たのを覚えている。

時代が前後するが、高橋喜平は新潟県十日町で一九五〇年から開催されている雪まつりの発案者の一人でもある。豪雪地帯である十日町に農林省林業試験場の職員として赴任していた折、雪を敵視せず親しむことができればと考えた末のアイデアが、雪まつりだった。自然という大いなる存在を前に、敵対ではなく融和を目指す。それが、高橋喜平の人生を貫く思想であった。